

ボケの雄性花に関する研究

第2報 NAA塗布, 及び開花日と両全花の比率の関係

山口 聡・国重正昭

(野菜試験場久留米支場)

昨年の研究発表会において、ボケの雄性同株性について、同一の花ソウ内で早くに咲く花には両全花が多く、遅れて咲くにつれて、両全花が少なくなり雄性花が増える傾向を報告した。また、摘ライ処理によって、両全花の比率が有意なレベルで向上することから、両全花の発育には、発育途中の蕾同志の養分競合が関与している可能性を示唆した。

今回、ボケ品種“開運”を供試して、NAA塗布処理の両全花率に及ぼす影響を検討した。また、両全花率の推移につき、開花日ごとにまとめて検討を加えた。なお、両全花率は、全花数に対する両全花数の割合を百分率で示したものである。

材料及び方法

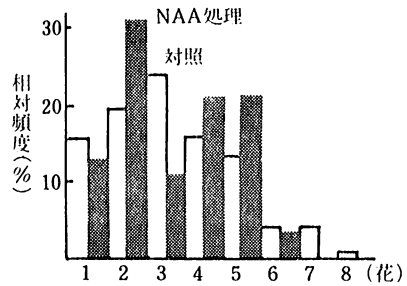
“開運”の枝条に着生している各花ソウごとに通し番号をつけた後、開花期の2ヵ月前、蕾がおよそ直径2mmのころより、1週間おきに、合計3回、濃度100ppmのNAA溶液を塗布した。前報では花柱長を5mmごとに4区分したが、今回は、花柱長10mm以下の花には受精能力が欠けていることから、10mmを境として、それ以下の場合を雌性花、それより長い場合を両全花として記録した。

結果及び考察

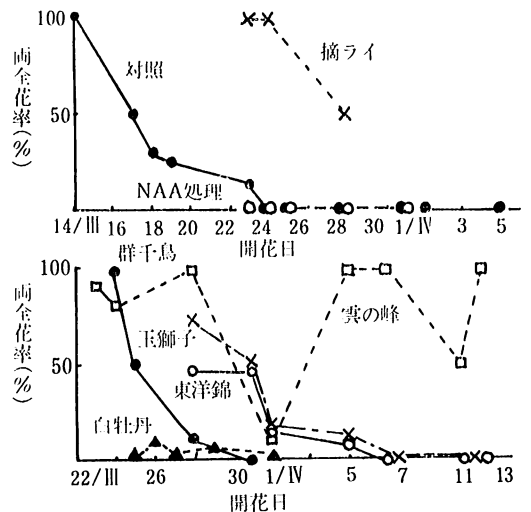
NAA処理した枝条においては、1花ソウ当たりの花数は平均して3.1花であり、対照区の花数の平均は3.2花であった。花ソウ当たりの花数の分布をみると、対照区の枝条では正規分布に近い分布であったが、NAA処理区では、中央が低くなり、ピークが2分された分布を示した(第1図)。NAAは、カンキツ類においては、摘ライ効果が認められているのに対して、ボケにおいては、最終的な花数については摘ライ効果が認められていない。しかし、花ソウ当たりの花数の分布の乱れから、蕾の発育ステージによって、NAAに対する感受性の差が考えられ、この点について、更に実験を重ねる必要があろう。

NAA処理した枝条での両全花率は、開花期間中を通して、すべて0%であった(第2図)。開花始めも10日ほ

ど遅れたことから、NAAは、蕾の発育に対して、阻害的に作用したものと考えられる。対照区においては、開花初期に両全花率が高く、中期に低下し、晩期には0%になっていた。他の品種についても、両全花率の推移を調査したところ、開花期の初めは両全花率が高く、後期には両全花率が低下するのが共通した傾向であった(第3図)。



第1図 花ソウ当りの花数



第2図(上), 第3図(下) 開花日別両全花率の推移